

リカードウの新機械論再考(上)ーマカァロクとの往復書簡の検討を中心としてー

著者	中山 孝男
雑誌名	東邦学誌
巻	40
号	1
ページ	67-76
発行年	2011-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000237/

リカードウの新機械論再考（上）

—マカアロクとの往復書簡の検討を中心として—

中山孝男

目次

1. はじめに
2. 『原理』第3版出版以前のリカードウ—マカアロク往復書簡の検討
3. 『原理』第3版出版直前の状況 (以上、本号)
4. 『原理』第3版出版以降の往復書簡の検討
5. むすび

1. はじめに

われわれは、前稿¹⁾において、リカードウが『経済学および課税の原理』²⁾第3版（1821年）に追加した第31章「機械について」における、いわゆる彼の新機械論の解明のための一論点として、彼の労働需要量決定論にかんして論じ、次の諸点を明らかにした。

- (1) リカードウは、流動資本を総資本のうち労働者を雇用する部分を指す概念として用いたわけではなく、流動資本と固定資本とを、資本の回収期間の相違、すなわち回転期間の長短によって区分していたこと。
- (2) リカードウは、労働の需要量を規定する要因として総生産物の物的数量を考えていたこと。
- (3) リカードウ『原理』第31章での数値例を用いたモデルにおいては、各年度で雇用できる労働者の数は、前年度の総生産物の大きさに上限を画されていること。
- (4) 機械を生産し、生産過程に導入すると総生産物の物的数量が減少することがあるが、その場合は雇用労働量が減少するので、機械は労働階級にとって有害であるとリカードウが論証したこと。

ところで、リカードウが新機械論で主張しようとした本質を解明するのに『原理』そのものにおける叙述を丹念に解釈する方法があるのは言うまでもないが、それ以外の著作、ノート（草稿）、多数の書簡など、彼の『全集』におさめられている多くの文献資料が利用できる。そこで、本稿では、リカードウを「わが師として尊敬することを常に誇りとしている」³⁾マカアロクとリカードウとの間でやりとりされた往復書簡を検討することを中心に、リカードウの新機械論解明の一助とし、上の諸論点を補強することを目的にしたい。

以下、ほぼ年代順に書簡およびそれに関する文献を読み解きながら、リカードウは新機械論

でいったい何を、どのように主張したかったのかをできるかぎり明らかにしていく。

(注)

- 1) 中山孝男「リカードの労働需要論——新機械論における叙述を中心に——」『東邦学誌』第38巻第1号、2009年6月。
- 2) Ricardo, David, *On the Principles of Political Economy and Taxation*, in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the Collaborarion of M. H. Dobb, Cambridge University Press, vol. I, 1951. 以下では、本書のことを『原理』とよぶ。また、リカードウにかんする引用は、*Works*と略記した後、巻数と原ページ、邦訳ページ（全集刊行委員会訳『リカードウ全集』雄松堂書店、1969-78年）を示す。
- 3) 1821年6月5日付けリカードウ宛てのマカアロクの手紙。 *Works*, VIII, p. 381. 邦訳430ページ。

2. 『原理』第3版出版以前のリカードウ—マカアロク往復書簡の検討

「はじめに」で述べた本稿の課題解明にとって、最も早い時期の重要な文献として、マカアロクが『エディンバラ・レビュー』に寄せた論文¹⁾がある。本節では、まずはじめにこの「課税と穀物法」論文の多様な内容のうち本稿の課題にとって必要な箇所を紹介し、この論文刊行後にリカードウとマカアロクの間で交わされた往復書簡の検討をとおして、リカードウが『原理』第3版を出版する以前、二人が機械採用と労働需要との間の関係をどのように考えていたかを明らかにしていきたい。

さて、マカアロクによるこの「課税と穀物法」論文は、「名目上はバートンのパンフレット²⁾の紹介³⁾」であり、機械の導入が労働者の雇用にいかなる影響を及ぼすのかに関して、バートンの所説を次のように肯定的に紹介している。すなわち、「労働の賃金が静止的であるときには、親方製造業者もしくは資本家にとって、彼がその余剰収入を、彼の流動資本、すなわちその労働者の賃金を支払うための基金を増加するのに使用するか、または、それを固定資本、すなわち機械に投資するかは、比較的にどうでもよい事柄である。しかし、……賃金が騰貴するときには、資本家は切実に、労働者よりも機械を使用しようとするであろう。その理由は明白である。——賃金の騰貴は、それが労働者の雇用者に影響を与えるのと同じ程度には、機械の所有者に影響を与えるものではないからである⁴⁾」と。つまり、資本総額は同一であるが、その構成が異なる資本家の間——たとえば、機械を用いずにその資本の全部を労働者の賃金支払いに充てる「労働者の雇用者」と、機械を用い追加的に労働者を雇って財貨を生産する「機械の所有者」との間——では、賃金騰貴が及ぼす影響は「同じ程度」ではないのであり、この場合、賃金騰貴による利潤の減少は、後者よりも前者の方にとってより大きいのである。したがって、このことは、賃金騰貴時における「機械の迅速な導入を説明するのに役立つ⁵⁾」のである。また、マカアロクは、別の箇所「機械に投下される固定資本は、常に、かなりのヨリ多くの流動資本にとって代わるに相違ない。——なぜなら、さもなければ、機械を製作する動機は存在しえないからである。そこ

で、機械の最初の結果は、賃金率を騰貴させるというよりはむしろ、それを低下させることである⁶⁾と述べている。つまり、賃金騰貴により機械の導入が促進されるが、こうして導入された「機械に投下される固定資本」は、それによって排除される労働者に投下されていた「ヨリ多くの流動資本にとって代わるに相違ない」、すなわち、機械を生産するのに必要とされる労働者までをも考慮に入れても、機械導入によって雇用される労働者数は減少する、と主張されているのである。

このように、きわめて忠実にパートンの主張にそって書かれたマカアロクの「課税と穀物法」論文を読んだリカードは、1820年3月29日付けの書簡において、次のように反論している。「最近号の『エディンバラ・レビュー』にのった課税にかんする高論のなかのいくつかの論点についてすこしく論じあってみたいと存じます……。……問題の論文のなかであなたはこれまでご自分であるように申し分なくまた明確に解明された経済学の偉大な真理を、いつもの力強さと才能をもって擁護なさっています。しかしそこでお触れになっている論点には些細ながらご再考をわずらわしたいものがあります⁷⁾と、リカードがマカアロクに宛てて書いた書簡においてしばしば見られるように、この書簡においてもはじめはマカアロクの所説を高く評価するように書き始め、そののち考えを異にする論点に移っていく。そして、本書簡でマカアロクに「再考をわずらわしたい」論点の1つが、機械の使用と労働需要に関する点である。それについては、リカードはこう述べている。「機械の使用はけっして労働にたいする需要を減少させない、と私は考えます——それはけっして労働の価格の下落の原因ではなくて、労働の価格の騰貴の結果であります⁸⁾」。

ここで、リカードが最も強く主張したいことは、「機械の使用はけっして労働にたいする需要を減少させない」ということである。この点は非常に明確に読み取れるし、上でみたマカアロクの「課税と穀物法」論文にたいする最も強力に反論する必要があると考えていた点であろうということも当時のリカードの機械論⁹⁾を考慮すれば容易に理解できる。しかしながら、その反論の論拠についてわれわれは、それが十分に説得的であると評価することはできない。リカードは、「それ〔＝機械の使用〕はけっして労働の価格の下落の原因ではなくて、労働の価格の騰貴の結果である」と述べている。これは、マカアロクが、前掲の「課税と穀物法」論文で、「機械の最初の結果は、賃金率を騰貴させるというよりはむしろ、それを低下させることである」と述べていることにたいする反論であると考えられるが、じつはこれが反論になっていない、と言わざるをえない。つまり、マカアロクが、〈機械の使用〉→〈賃金率の下落〉を主張しているのにたいし、リカードは、〈労働の価格の騰貴〉→〈機械の使用〉を反論として主張しているにすぎないのである。これでは全く反論としては意味がなく、二人の主張をつなぎ合わせれば、〈労働の価格の騰貴〉→〈機械の使用〉→〈賃金率の下落〉というそれ自体きわめて常識的な論理が導出されるだけであり、二人の主張が対立するような関係にはなっていない。要するに、リカードの主張は「課税と穀物法」論文におけるマカアロクの所説にたいする反論としてはきわめて不十分なのである。

また、いま上で検討した引用文に続く箇所では、リカードは、「もしある人が人間の労働よりも蒸気機関を使用するほうがまさに安いところから蒸気機関をすえつけたとしても、もしそれにもなって労働の価格が下落すれば他の人もまた機械の使用を選ぶほうが利益だということにはならないでしょう」¹⁰⁾と述べている。ここで言われていることは、機械を使用すると労働の価格は低下するだろう、そうだとすると他の人が機械を使用して利益を得る理由がなくなるので——なぜなら、リカードが機械使用の理由として考える労働価格の騰貴が消滅してしまっているの——、したがって機械の使用が広がっていくことはない、ということである。ここからは、リカードが、じつは先ほどマカアロクの論理として掲げた「機械の使用」→「賃金率の下落」をはっきりと認めているということが読み取れる。しかもこの論理を認めることの内部には「機械の使用」→「生産物価格の低下」→「賃金率の下落」の中間項を挟む論理が隠されており、それをもまた認めることになるのである。

ここまで、マカアロクの「課税と穀物法」論文およびそれにたいしてリカードが書いた書簡をみてきた。この当時マカアロクはバートンの主張に与して機械採用は労働需要を減少させるであろうと考えていた。それにたいしてリカードは機械の使用は労働に対する需要を減少させない、という考えであった。その後、二人の間で何回かにわたって書簡のやりとりが交わされたが、機械使用と労働需要の関係に関するやりとりは、しばらくの間は見出すことができない。

この問題に関する言及が次に見いだせるのは、1820年8月2日付けのマカアロク宛リカードの書簡においてである。それに関係する箇所は、次のように書き始められている。「当地にきて以来マルサスの本¹¹⁾をもう一度読みかえました。この本に初回のときよりもいっそうひどい不満をすら覚えます。なにか誤りをふくまないページはほとんど1ページもありません」¹²⁾。つまり、この書簡は、同年4月に刊行されたマルサスの『経済学原理』を再読し始めてから書かれたものであり、この中でリカードは機械使用と労働需要に関して次のように書いている。「もし生産を容易にする手段によって商品の量を増大させるならば（彼〔＝マルサス〕は言うのです）その手段が労働にたいして同等のまたはより多くの雇用を与えないかぎり、社会を害するものであると。これは明らかに真実ではありません、というのはもしより少ない労働をもって同量の商品を手に入れることができるならば、二つの事柄のうちどれか一つがかならず起こってくるからであり、つまり同数のまたはより多数の人口に雇用を与え、享楽手段をさらにいっそう増加させることになるか、あるいはまた、同額のまたはより少額の貨幣賃金を払ってしかも被雇用者がより多量の商品を支配することを可能にさせることになるかであり、もし彼らが労働の報酬よりも怠惰を選ばなければ彼らはより少ない労働をもって同量の享楽品を支配するでしょう。生産物の豊富さがどのようにして労働需要の減少にみちびくのか私には理解できません」¹³⁾と。この引用文の前段でリカードが「明らかに真実ではありません」と言っているのは、「もし生産を容易にする手段によって商品の量を増大させるならば」、リカード自身は社会の総生産物の物的数量が社会の雇用量を規定すると考えているので、必然的に雇用が増大すると考えるが、マルサスは「その手段が労働にたいして同等のまたはより多くの雇用を与えないかぎり、社会を害

するものである」と言っているからである。つまり、労働生産性が上昇し商品の量が増大するならば、リカードウの論理では必ず雇用量が增大するはずなのに、マルサスの主張ではそうならないことを批判しているのである。この点に関しては、上の引用文の最後の1文においても同様の批判がなされている。すなわち「生産物の豊富さ」は、リカードウにとっては必然的に労働需要の増大を導くはずであるのに、マルサスにおいては「労働需要の減少」が導かれる、その点は「私には理解できません」とリカードウは述べているのである。ここでは、リカードウの労働需要量の決定についての論理、すなわち総生産物の物的数量の大きさが労働雇用量を規定するという論理を確認することができる。

さて、上で取り上げた書簡が書かれた以前（1820年7月27日）に、リカードウはJ. ミルに宛てて、「こちら [=ブライトン] へはマルサスのものと私のもの以外はなにも持ってきていません。前者を大いに注意して読みながら、注釈に値すると思われる箇所に評注を加えています。そういう箇所が意外に多いのです¹⁴⁾」と書いているとおり、同年4月に刊行されたマルサスの『経済学原理』を再読するに際して、「評注を加えてい」ったのである。そして、同年11月16日付けの同じくJ. ミル宛の書簡で「私のマルサス評注は（出来具合はともかく）完成しました¹⁵⁾」と伝えている。こうしてまだ手稿の形ではあったが完成した評注が、現在『マルサス評注』¹⁶⁾とよばれているものである。そして、その存在を知っていたマカアロクは、早い時期からそれを読みたいと思っていたようであったが¹⁷⁾、リカードウとしてはマルサスに先に見せたあとでマカアロクに送るつもりでいたようであった¹⁸⁾。しかし、マルサスがリカードウのところへ訪問する予定が変更になったために¹⁹⁾、その手稿は先にマカアロクへ送られた²⁰⁾。約1ヶ月後、マカアロクから次のような内容の書簡とともに評注はリカードウのもとに戻ってきた。「私としてできるだけ注意を払って読ませていただき教示とともに楽しみにあずかった玉稿をここにお返しします……—蓄積にかんする、および機械の改良にかんするあなたの評言ほど完全で満足なものはありません——ここでのあなたの議論はまったく論争の余地のないものです——あなたは実際に論敵が逃げ出せる抜け穴や隙間を一つも残していません——彼に残されているのは無条件に降伏することだけです²¹⁾。見られるように、マカアロクは、「蓄積」および「機械の改良」に関するリカードウの理論を「完全で満足なもの」と絶賛している。

では、リカードウはマルサスの叙述にたいして、いったいどのような「評言」を書いているのであろうか。本稿における課題にとってとくに重要なのは「機械の改良」に関するマルサスの所説にたいしてリカードウがどのような評注を書いているかということである。具体的には、マルサス『経済学原理』第7章第5節において述べられている論点をめぐりリカードウがどのように批判しているのかということであるが、前述した1820年8月2日付けマカアロク宛ての書簡でリカードウが書いていたのと同様の批判が『マルサス評注』でも書かれている。すなわち、「……私は、マルサス氏の次の言葉に同意はできない、『それはもっと多くの生産物を生みだすかもしれないけれど、以前と同じ数量の労働を支配しないであろう。……』²²⁾」と。そして、この同じ評注の中に、本稿の課題にとって決定的に重要なリカードウの叙述を見いだすことができる。つ

まり、「労働の雇用能力は資本の価値に依存せず、資本が生み出す年々の生産物の量にとくに依存している」²³⁾ という叙述がそれである。これこそ前稿においてわれわれが見出した結論の一つである。リカードウはこのように考えていたので、生産物が数量的に増大するとき雇用量が減少するかもしれないなどと述べるマルサスを批判していたのである。リカードウが理解している労働の雇用量を規定するのが総生産物の物的数量であるというこの考えは、前稿において明らかにした論点のひとつでもあったし、また本稿において後述するとおり、彼の『原理』第3版の出版に際しても、またそれ以後の書簡においても一貫している。

ところで、1821年1月22日付けのリカードウ宛てマカアロクの書簡の末尾近くには、「高著の第3版が広告されているのを拝見して心から嬉しく思っています」²⁴⁾ と早くもリカードウ機械論にとって一大画期となる『原理』第3版の刊行を予告する広告について触れられている。しかし、実際に刊行されるまでにはもうしばらく時間がかかったのである。その頃のやりとりに関しては、節を改めて検討することにした。

(注)

- 1) 本論文の正式題名は、McCulloch, John Ramsay, Art. IX. 1. Remarks on the Report of the Select Committee of the House of Commons on the Poor-Laws. By J. H. Moggridge, Esq. Bristol, 1818.
2. Observations on the Circumstances which Influence the Condition of the Labouring Classes of Society. By John Barton, Esq. London, 1817.
3. Observations on the Rise and Fall of the Manufacturing System of Great Britain, &., London, 1819. *The Edinburgh Review*, Jan. 1820, という非常に長いものである。そして、欄外には“Taxation and the Corn-Laws”と書かれている。(よって以下、本論文をマカアロクの「課税と穀物法」論文とよぶ。)ただし、本雑誌は「1月号」となっているが、「1820年1月号は3月まで刊行されなかった」(*Works*, VIII, p.159 (footnote). 邦訳181ページ)。なお、邦訳に、相見志郎訳「マカアロク『課税と穀物法』』『経済学論叢』第19巻第5・6号、1972年2月、がある。
- 2) Barton, John, *Observations on the Circumstances which Influence the Condition of the Labouring Classes of Society*, London, 1817 (真実一男訳『社会の労働者階級の状態』法政大学出版局、1990年)。なお、バートンの機械論に関する卑見は、中山孝男「J・バートンの機械論に関する一考察」『一橋研究』第12巻第3号、1987年10月、を参照されたい。
- 3) *Works*, VIII, p.171 (footnote). 邦訳196ページ。
- 4) McCulloch, op. cit., p.170. 邦訳172ページ。
- 5) *Ibid.*, p.171. 邦訳173ページ。
- 6) *Ibid.*, p.171. 邦訳173-4ページ。
- 7) *Works*, VIII, p.168. 邦訳190ページ。
- 8) *Ibid.*, p.171, 邦訳193ページ。
- 9) 真実一男『機械と失業——リカアドウ機械論研究——』理論社、1959年、第2篇とくにその第2章を参照のこと。本書は、わが国におけるリカードウ機械論およびそのマルクス相対的過剰人口論等への理論的系譜に関する研究の嚆矢とも言える労作である。なお、本書にたいする疑問を提示したものに、中山孝男「リカードウの機械論とマルクスの相対的過剰人口論」『工学院大学研究論叢』第24号、1986年、がある。
- 10) *Works*, VIII, p.171, 邦訳193ページ。
- 11) Malthus, Thomas Robert, *Principles of political economy considered with a view to their practical*

application, London 1820. (邦訳、小林時三郎訳『マルサス 経済学原理 (上・下)』岩波文庫、1968年。)

- 12) *Works*, VIII, p.215, 邦訳243ページ。
- 13) *Ibid.*, pp.215-6. 邦訳243ページ。
- 14) *Ibid.*, p.212. 邦訳239ページ。
- 15) *Ibid.*, p.296. 邦訳333ページ。
- 16) "Notes on Malthus's Principles of Political Economy", *Works*, II.
- 17) 「マルサス氏の本についてのあなたの所見を精読することほど、私に楽しみをあたえるものはないと存じます」(1820年11月28日付けリカードウ宛てマカアロクの手簡、*Works*, VIII, p.312. 邦訳352ページ)。
- 18) 「彼 [=マルサス] は自分の著書のつぎの版を出すまえにそれに加えた私の批評を是非見たいと言います。……それをマルサス氏に見せたあとですぐにお送りする [ことにします]」(1820年12月4日付けマカアロク宛てリカードウの手簡、*ibid.*, p.314. 邦訳355ページ)。
- 19) 「私の手稿をあなたに送ったすぐあと、この季節にはこちらでは会えまいと諦めていたマルサス氏が到着し、私のもとで数日間滞在しました。彼は私の考察を見ることができないのを残念がっていました」(1821年1月17日付けマカアロク宛てリカードウの手簡、*ibid.*, p.386. 邦訳379ページ)。
- 20) 「私はそれをロンドンに送り、ただちに郵便であなたの許へお届けするように指図しました」(1820年12月13日付けマカアロク宛てリカードウの手簡、*ibid.*, pp.318-9. 邦訳360ページ)。
- 21) *Ibid.*, pp.338-9. 邦訳382ページ。
- 22) *Works*, II, p.352. 邦訳440ページ。
- 23) *Ibid.*
- 24) *Ibid.*, p.341. 邦訳385ページ。

3. リカードウ『原理』第3版出版直前の状況

リカードウの『原理』第3版出版の直前に、リカードウとマカアロクとの間において機械の使用と労働需要とに関する興味深いやりとりがあった。そのそもそもの始まりは、約1年前に発表されたマカアロクの「課税と穀物法」論文であった。前節でみたとおり、そこにおいてマカアロクは、バートンの主張に与して機械の使用は労働需要を減少させると述べていた。それにたいしてリカードウは、「機械の使用はけっして労働にたいする需要を減少させない」と反論したのであった。ただ、この論点に関してはその後の二人の間における往復手簡においては、特段論争になるといふほどのことはなく、リカードウの『原理』第3版がいよいよ印刷にかかる段階に入っていた¹⁾。

ちょうどその頃、マカアロクは『エディンバラ・レビュー』に載せる論文を書き上げた。彼はリカードウ宛ての手簡の中で、同誌の編集者であるジェフリ氏が当地 (=エディンバラ) を「出発 [する] 前に機械と蓄積にかんする論文²⁾」を印刷したかった」ので、しばらくリカードウ宛てに手簡を書く時間がなかったことをはじめに詫びた後で、「問題の論文を一読されれば、私の原理の大部分を借用した源泉を容易に発見なさるでしょう——今度の場合もこれまでと同様あな

たに負うところが多大でした——いただいたお手紙やマルサス氏の著作に対するあなたの評注を拝読して、この問題の解決を左右する諸原理の十分な知識を得ました³⁾と書いている。このマカアロクの「機械論」論文は、「課税と穀物法」論文にたいするリカードウの反論以来の書簡による議論などから得られたさまざまな「諸原理の十分な知識」を「源泉」にして書かれたものである、とマカアロクが書簡に書いていることから、リカードウの所説に素直にしたがって書かれたものだと容易に推測できる。しかしながら、衆知のとおり、この時点では当のリカードウ自身がその機械論を変更していたのである⁴⁾。これに関しては後ほど詳述することとして、まずマカアロクの「機械論」論文において機械の使用と労働需要量の変化に関して述べられている内容をみてみよう。

マカアロクは次のように述べている。「機械をある仕事に導入すれば、必ず、ある他の仕事において、解雇された労働者にたいする、それに等しい、あるいは、ヨリ大なる需要を生ぜしめる。それが常に労働者に与える唯一の苦難は、それが、ある場合には、労働者に彼の仕事を変えることを強いるということである。しかしながら、これはきわめて大きな苦難というものではない⁵⁾と、「課税と穀物法」論文とは正反対の主張、すなわち機械の導入がそれ以前と「等しい、あるいは、ヨリ大なる」労働需要をもたらす、言い換えれば労働需要を減少させないことを主張している。ただここでは、労働者に与えられる唯一の苦難として、「彼の仕事を変えることを強いること」が指摘されてはいるが、マカアロクによれば、「これはきわめて大きな苦難というものではない」とのことである。さて、機械が導入されても労働需要量が維持される、ないしは増大されることの理由として述べられているところをみてみよう。マカアロクは、「製造業者の労働を雇用する力は、その資本の総量に依存するものではなくて、その資本のうちの流動部分の量にのみ依存するものである⁶⁾と、労働需要量を規定するものは総資本のうち「流動部分の量」（これはすぐ後で「流動資本の量」⁷⁾と言い換えられる）であるといわれる。マカアロクは、総資本を流動資本と固定資本の二つの部分に分割して把握している。これは、マルクス以前の古典派経済学者にほとんど共通してみられる誤った資本の捉え方で、そのうちの流動資本の大きさによって労働需要量が規定されると捉えられていたが、ここでは彼が事実上「流動資本」概念でもって「可変資本」概念を考えていたと解釈し、機械導入が労働需要を不変に保つないし増大させる理由をマカアロクがどのように述べているかの検討に入ろう。

彼は、これについて、「社会全体は常に確実に、労働を節約できるすべての発明を採用することから、大量の富の増加をひきだすことができるのである。われわれは既に、財貨を購入しようとする力も意思も、機械の改善によって減少するものではないし、また減少することはいえないうことを示してきた。そして、労働を雇用する手段は、損失なしにひきあげることのできる流動資本の量に依存するものであるから、労働雇用手段の減少がありえないことは明らかである⁸⁾と述べている。つまり、「労働を雇用する手段」は、「流動資本の量に依存」し、流動資本は機械の導入ないし機械の改善に際して「損失なしにひきあげることのできる」、すなわち別な生産部門において再び労働雇用手段として「損失なしに」、減少することなしに機能すること

ができる。したがって、機械導入・改善に際して労働需要は減少することはありえない、とマカアロクは考えていたのである。ここでのマカアロクの論理は、まさしくマルクス『資本論』第1巻第13章第6節でいわれている「機械によって駆逐される労働者に関する補償説」⁹⁾そのものである。

さて、機械の使用と労働需要量の変化の関係について上のような内容を含んだ「機械論」論文を書き上げたマカアロクは、実はすでにリカードウが『マルサス評注』を執筆している間に、機械の使用と労働需要の関係についてリカードウ自身がそれまでにいただいていた見解を変更しつつあったことを見逃していたのであった。すなわち、その「評注 149」には次のようなことが書かれている。「一般に、蓄積された資本は、固定資本と流動資本の混合から成るであろう。その際、資本を貯蓄する人にとっては、それが固定資本として用いられるか流動資本として用いられるかは、大したことでないように思われる。もし利潤が10パーセントであれば、どちらの資本も等しく200ポンドの資本について200ポンドの収入を生み出すであろうが、しかし固定資本として用いられるなら、250ないし300ポンドの額に上る財貨が資本を補填し、200ポンドの利潤を与えるとよいであろう——もし流動資本として用いられるなら、資本を補填しそして200ポンドの利潤を与えるには、生産される財貨は2200ポンドで販売される必要があるとよいであろう」¹⁰⁾。ここで述べられているのは、資本が蓄積される場合であって、資本量が一定の場合に資本の構成が高度化する場合ではないので、彼が（その後）『原理』第3版第31章の前半部分で述べることになる場合とは異なる。しかし、それでも、次のようなことを主張しようとしているのである。すなわち、資本蓄積の額が2000ポンド、利潤率が10パーセントのとき、蓄積部分がすべて流動資本として用いられるならそれにより生産される財貨は、資本の補填分プラス利潤額合わせて2200ポンド、また、蓄積部分がすべて「固定資本として用いられるなら、250ないし300ポンドの額に上る財貨が資本を補填し、200ポンドの利潤を与える」。ここで、200ポンドの利潤を越える額（50ないし100ポンド）は、固定資本の損耗分＝減価償却分と考えられていると推測される。このように、同額の資本蓄積の場合では、そこから得られる利潤額は同額であるので、「資本家にとっては、彼の資本が固定資本から成ろうと流動資本から成ろうと、大したことでないが、しかし労働の賃金によって生活する者にとっては、それはこのうえなく重要である。彼らは総収入の増大に大きな利害関係をもっている、けだし、人口を養う手段が依存しなければならないのは総収入だからである。もし資本が機械として実現されるとすれば、増大せる労働量にたいする需要はほとんどないであろう、——もし資本が労働にたいする追加需要をつくり出すとなれば、それはかならず労働者によって消費されるような物として実現されるであろう」¹¹⁾。みられるように、追加資本部分のことであるとはいえ、それが固定資本として、あるいは流動資本として実現されるかによって労働者に及ぼす影響が異なる、つまり、固定資本＝機械として蓄積されるならば、流動資本として蓄積される場合よりも総収入が小さくなり、労働者にとって不利になるということが主張されるようになった。以前、マカアロクがそれに沿った主張をしたことでリカードウから批判されたバートンの論理にかなり傾いた主張を、ここでのリカードウは行ってい

るのである。

マルサス『経済学原理』の評注を執筆している間に、リカードウに生じたそうした変化にはほとんど気づくことなく、マカアロクは「機械論」論文を書き上げ、前に引用した書簡をリカードウに宛てて書いたのであった。そして、この書簡を受け取ったリカードウはまだ当該論文を受け取っていなかったため、マカアロクが「機械論」論文でどのような主張をしているのかをその時点では知るよしもなく、またマカアロクも自分が書いた論文の中で扱った機械採用と労働需要の変化にかんする内容には一切触れることもなく、先に引用した1821年3月13日付けの書簡では価値論および農業問題に関する話題だけを書いたにすぎなかったため、リカードウとしてもまだこの時点では自分自身の機械論を変更したことをマカアロクに積極的に告げようとはしなかったし、あるいは、すでに告げていたと勘違いをしていたようである。これについては節を改めて詳述する。

(注)

- 1) 「それは現に第3版を刷るために印刷屋の手に渡っています」(1821年1月25日付けマカアロク宛てのリカードウの書簡、*Works*, VIII, p.342. 邦訳387ページ)。
- 2) 本論文の正式題名は、McCulloch, John Ramsay, Art. VI. The Opinions of Messrs Say, Sismondi, and Malthus, on the Effects of Machinery and Accumulation, Stated and Examined. London, 1821. *The Edinburgh Review*, XXXV March 1821. であり、その欄外には “Effects of Machinery and Accumulation” と書かれている。(よって以下、本論文をマカアロクの「機械論」論文とよぶ。) ただし、本雑誌は「3月号」となっているが、「5月の遅くに出版された」(*Works*, VIII, p.366 (footnote). 邦訳412ページ)。なお、邦訳に、相見志郎訳「マカアロクの機械論」『経済学論叢』第19巻第1号、1970年3月、がある。
- 3) *Works*, VIII, pp.351-2. 邦訳397ページ。
- 4) リカードウが自身の機械論を変更した時期の推定には論者によって若干のずれがあるが、「彼の機械論における『見解変更』の画期は20年の秋であったとみるべきではなからうか。」(羽鳥卓也『リカードウの理論圏』世界書院、1995年、163ページ)
- 5) McCulloch, op. cit., p.115. 邦訳111-2ページ。
- 6) Ibid., p.116. 邦訳112ページ。
- 7) Ibid., p.116. 邦訳113ページ。
- 8) Ibid.
- 9) 「多くのブルジョア経済学者たとえば……マカアロク……等々の主張するところでは、労働者を駆逐するすべての機械設備は、つねにそれと同時に、また必然的に、それと同数の労働者を働かせるのに十分な資本を遊離させるということになる」。(Marx, Karl, *Das Kapital*, Bd.1, MEW Bd.23, S.461, 邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻、573ページ)。
- 10) *Works*, II, p.235. 邦訳300-1ページ。
- 11) Ibid., pp.235-6. 邦訳301-2ページ。

(以下、次号)

受理日 平成23年3月31日